

成熟社会がめざすもの

私事ながら、首都圏と郊外をつなぐ新しい鉄道が2年前に開通し初めて電車に乗ったとき、電車から林や畑などの美しい風景が見えることにささやかな感動を覚えた記憶がある。しかし、最近では沿線でマンションやショッピングセンターの建設が進み、林や畑など沿線の緑あふれる風景が次第に減ってきていることが実感され、いずれこの路線も他の路線と同じようになってしまうのではと一抹の不安と寂しさを感じることもある。都市に限らず地方であっても、日本の街づくりは景観という観点からは失敗しているところが多いように思う。日本の街並みの景観は諸外国と比べて劣悪だという評価は、マスコミのみならず広く国民の間にも定着している。

日本はどこ地域でも、その周辺に地域にそぐわない建物や道路がいつ建設されるかわからない不安を抱える社会だ。戦後の荒廃と貧困から立ち直るため物質的の充足が何よりも優先され、時には深刻な公害問題をも引き起こしながら工業立国をめざし近代化が進められてきたことを思い起こせば、ゾーニングや景観などに至ってはさほど重要視されて来なかったと言える。

しかし、世界第2位の経済大国となり物質的には豊かになり生活も便利になったものの、依然として日本の社会は豊かな自然環境と良好な景観に恵まれた国土形成をめざしているようには見えない。大都市では高層ビルの建設ラッシュが続く一方で、地方ではシャッターを下ろした商店街が広がり、山村には手入れが行き届かず荒れた森林や耕作放棄された田畑が広がっている。むしろ今の日本社会に見られるのは、企業も個人もグローバルな経済競争にさらされるなかで身をすくませ、孤立感を深めながら生き残りをかける姿だ。そこには美しい景観に恵まれた豊かな国土をどう築くかなどといった余裕はない。企業はグローバルな競争激化のなかで日本の優位性を失うまいと一層のコスト削減と競争力強化に取り組み、個人は拡大する格差社会のなかで「負け組」になるまいと金銭と地位の獲得に追い立てられる姿だ。

それでも、変化の兆しは見える。企業のCSR活動などに見られるように、環境問題に取り組むほか、地域社会の一員として地域の発展に貢献する取り組みを示す企業が増えている。また、個人のレベルでは、地域ボランティア活動などが広がりを見せているほか、個人の消費行動に変化も見られる。環境にやさしい商品の選択、エコバッグの利用など環境負荷の少ないライフスタイルに心がけ、価格は多少高くても安全な食物を購入するなど生産者との結びつきを強めることを志向する人が増えている。そこにあるのは、社会的連帯感と言ってもいい。地域社会のなかで、あるいは地域を越えて、地方の自立と発展に参画する姿である。このように地域社会づくりに向けた市民の意識は次第に高まりつつあると見られる。

時間のかかる困難な取り組みだが、自分の住む地域を良好な景観と自然環境に恵まれた安らぎのある生活空間として改善していくことが大切だ。それが地域への愛着を一層強めることになると思う。地方の再生を考えると、景観や自然環境は貴重な財産だということはしっかりと心にとどめておきたい。

((株)農林中金総合研究所取締役調査第二部長 都 俊生・みやことしお)